

# 博士学位論文審査要旨

申請者 松本和也(早稲田実業学校教諭)

論文題目 イエズス会宣教師が見た中近世移行期日本の国王と国家

申請学位 博士(学術)

## 審査員

主査 外園豊基 早稲田大学教授 博士(文学)(早稲田大学)

副査 村田安穂 早稲田大学名誉教授

副査 紙屋敦之 早稲田大学教授 文学博士(早稲田大学)

副査 大橋幸泰 早稲田大学准教授 博士(文学)(早稲田大学)

## 1. 目的と構成

本論文は、15－16世紀にあたる中近世移行期日本の国王・国家・権力を、当該期を対象とする研究蓄積をふまえながら、イエズス会史料という全く素材の異なる史料を用いて、イエズス会宣教師から見た日本の国家像・権力者像をもとに考察するものである。また、イエズス会史料は従来キリスト教史やイエズス会修道会史の史料として用いられてきたが、それだけではなく、広く日本史研究全般にも利用できる、価値の高い史料であることも示していくことも本論文の目的の一つである。

このような目的のために、本論文では二部に分けて当該期日本の国家・権力について考察した。構成は以下の通りである。

序 章 イエズス会宣教師の権力者・国家認識の意義

第一部 イエズス会史料における中近世移行期権力

第一章 ルイス・フロイス書翰の日本語表記

第二章 永禄十二年宗論の基礎的考察

第三章 イエズス会宣教師宛織田信長朱印状

第四章 永禄四・五年の畿内合戦と畿内布教

第五章 日乗の後半生

第六章 伴天連追放の論旨をめぐって

第二部 イエズス会宣教師の権力者・国家認識

第一章 イエズス会初期布教期の権力者・国家認識

第二章 フランシスコ・ザビエルの天皇・将軍認識

第三章 畿内布教期の権力者・国家認識

第四章 イエズス会宣教師の「天下」理解と朝廷理解

## 第五章 日本王権の重層性と二重性

### 終章 連合国家と二人国王国家

序章では、中近世移行期研究と中世・近世国家論に関する研究史の整理を行い、その上で中近世移行期研究におけるイエズス会史料の位置付けを示し、かつイエズス会史料編纂史を示して、イエズス会史料を用いた当該研究の意義を述べた。

第一部では、イエズス会史料の詳細な分析を行い、それらの個別研究の結果をふまえて中近世移行期権力の実態を探っていった。ここでは、布教活動中の事件、出来事から読みとっていくというミクロ的な手法を用いた。邦文史料の場合、日本史研究において原文書に基づく研究がすでに定着しているが、海外史料とりわけ南欧史料については、編纂された史料集が利用され、かつ訳文史料を扱う訳文主義という状況が今なお続いている。この現状を打破するためには、原本が存在するのか否かの確認、ない場合には諸写本の校合、邦文史料との比較検討といった研究を進めていく必要がある。そこで、各章においてイエズス会史料を実証的に検証しつつ、イエズス会の布教活動を取り上げて、当該期権力論に繋げる試みを行った。

第二部では、のべ数千万通におよぶ膨大なイエズス会史料の中から、日本の権力者情報を取り上げ、イエズス会宣教師の権力者観・国家観から中近世移行期日本の国家・権力の変容と、その移行過程を検討した。イエズス会が日本布教を計画した時期から織豊政権期までを対象に、イエズス会宣教師の権力者認識、とくに彼らの理解する日本の国王の所在と国家の枠組みに注目し、そこから彼らの国家観・国王観を読みとろうとした。いわばマクロ的見地から取り組んだのが第二部である。

## 2. 研究史における本論文の位置

大航海時代、ヨーロッパ人による非西欧諸国への進出が盛んに行われたことで、世界各地で異文化接触が行われ、東西文明双方に多大な影響を与えた。日本も例外ではなく、多くの南蛮文物とともにキリスト教が伝えられた。フランシスコ・ザビエルを嚆矢として、多くの宣教師が日本で宣教活動にあたった。その後、豊臣秀吉の伴天連追放令や、江戸幕府によるキリシタン弾圧・迫害が行われたにもかかわらず、多くの民衆がキリシタン信仰を堅持した。キリシタン研究ではこの時代を「キリシタン時代」と呼んでおり、日本史の時期区分では中近世移行期に位置する。

安良城盛昭氏の学説以来、長い間、織田期と豊臣期の間に大きな断絶があるとされてきた。これに対して、近年の中世史研究では、戦国村落史研究の諸成果から、戦国期から近世初期への移行過程に連続性が認められると反論している。こうした動きは現在の中世史・近世史両研究で受け入れられてきているものの、近世の画期を問う近世史研究と、中世・近世の連続性を見ようとする中世史研究の間で、見解の相違が今なお続いている。こうした状況が指摘される背景には、緻密な実証研究が多大な研究成果をあげている反面、

研究対象が細分化されていったことがあげられる。全体像を把握して移行過程をどう読みとるかという分析が困難になっている研究状況と密接に関係している。

そこで本論文では、従来とは異なる研究視角から分析を行い、そこで得られた結論を従来の研究蓄積と結びつけて中近世移行期研究を進めていくことが有効な研究手法の一つではないかと考えた。中近世移行期がキリシタン時代とほぼ合致するので、外国人宣教師の日本国家観、およびその推移という研究視角から中近世移行期研究に取り組むことが可能である。その中でもイエズス会は、来日当初から権力者との関わりが深かったことが指摘されている。事実彼らの書いた書翰や記録には、日本の権力者や国家に関する情報が多数記載されている。しかしながら、これまでイエズス会史料は修道会史や布教史に使用されるほかは、日本史の参考史料として取り上げられるに過ぎなかった。その理由として、同史料は信憑性という点で欠陥があるとの偏見があったことや、編纂史料集であるエヴォラ版日本書翰集やフロイス「日本史」等の編纂された二次的な史料を扱うことに甘んじてきたことなどがあげられる。しかし、良質のイエズス会史料を多数所蔵するローマ・イエズス会文書館がすでに一般研究者に閲覧を許可しており、海外においては原文書に基づく研究が進められている。

このように、現在、宣教師の書翰など編纂史料ではない一次史料によってイエズス会宣教師の日本国家観・権力者観を明らかにできる条件が整いつつあり、本論文はそうした条件のなかで新しい視角から中近世移行期日本の国家・権力のあり方を検討しようとしたものである。

### 3. 概要

第一部では、イエズス会史料を実証的に検証することに努め、イエズス会宣教師の布教活動のなかから、権力者とかかわりある事柄を取り上げ考察した。第一章から第五章において、イエズス会史料の史料研究と個別事例の検討を行い、第六章において、こうした個別事例をもとに当該期権力論に繋げる試みを行った。

第一章から第三章までは、1569年6月1日付、ルイス・フロイス書翰の史料研究を行った。第一章では同書翰に見られる日本語のローマ字表記に注目して、こうした表記が使用された意味と、宣教師の日本語理解について考察し、第二章では、永禄12年4月20日に行われたフロイスと日乗との宗論について考察した。続く第三章では、永禄12年に出されたイエズス会宣教師宛織田信長朱印状を考察し、第四章では、ガスパル・ヴィレラが畿内布教を行っている最中に起きた畿内合戦を取り上げ、ヴィレラが記した畿内合戦関連記事を邦文史料と照合して、彼の書いた記事の正確さを明らかにした。さらに第五章では、反キリシタンの代表ともいえる仏僧日乗の後半生について考察した。

第五章までの個別事例の検証をふまえながら、第六章で永禄12年におこったイエズス会宣教師の京都滞在の可否をめぐる動向を考察した。日乗をはじめとする反キリシタンによる宣教師排斥工作が行われたが、日乗とフロイスが宗論を行うまでは、その対立は宗教

上の対立に過ぎなかった。ところが宗論後、親キリシタンは宣教師の京都滞在を認めた織田信長朱印状を根拠とし、一方の反キリシタン側は正親町天皇から伴天連追放の論旨を手に入れ、それを根拠として宣教師追放を画策して親キリシタン側と対立した。こうして、両者の対立が宗教上の対立から、政治性を帯びた対立に変わっていった。また、これらの文書を発給した、正親町天皇・足利義昭・織田信長といった中央の権力者もこの対立の渦に巻き込まれていったが、正親町天皇と織田信長は穏便に事態を收拾しようと努めていった。このように第一部では、イエズス会史料によってこの時期の中央権力の動向を読みとることができる点を指摘した。

つづく第二部では、イエズス会史料にある日本の権力者情報をもとに、イエズス会宣教師の権力者観や国家観を明らかにし、そこから中近世移行期日本の国家・権力の移行過程を考察した。

第一章では、ザビエルが来日する以前に理解していた日本の権力者像と国家像を明らかにし、来日後そして入京後にその認識を改めるか否かを明らかにした。第二章では、ザビエルの天皇・将軍認識について、来日以前と来日以後に変化があるか否かを読みとり、ザビエルの考える日本国王について考察した。第三章では、畿内布教後、宣教師の間で共通認識となっていた、戦国期段階のイエズス会の権力者認識を明らかにした。第四章では、織豊政権の時代を取り上げ、先の戦国期の権力者認識と比べて、彼らの日本国家認識に変化があるかどうかを検討した。そして、第五章では、近年の研究で注目されている王権論について、イエズス会の権力者観から接近しようと試みた。

以上の各論における検討をふまえて、終章において以下の結論を得た。

第一に重要な点は、イエズス会史料の新たな価値を示したことである。従来、当該期日本の国家論や権力論は主に邦文史料を用いて論じられてきた。イエズス会史料には布教地情報が多く記載されており、内容も政治・社会・文化・宗教など多岐にわたるにもかかわらず、これまで史料の信憑性を疑う見地から、これらをほとんど検討せずに当該テーマは議論されてきた。しかし、本論文の検討により、宗教関連情報にとどまらないイエズス会史料は、日本史の各分野において、利用価値の高い史料であることが十分に認められる。本論文第一部で示したのはこの点にあり、第六章でそれを実証した。

第二に、イエズス会宣教師の天皇・将軍認識が時期によって変化したことを示したことがある。イエズス会宣教師は、来日以前では天皇と将軍をそれぞれ日本国王とする統一国家としてとらえていた。この認識は来日後においても改められることはなかったが、ザビエルが入京すると、京都の荒廃ぶりを目の当たりにして、その認識を改めた。それ以降、宣教師は戦国大名を日本の一国王と位置づけていくことになり、大名領国を独立性のある国家とみなしたのである。それがガスパル・ヴィレラによって畿内布教が開始されると、彼らは再び天皇に注目することになり、日本の権力者情報を伝えていくとともに、従来通り戦国大名を領国の国王としながら、その大名を統括する天皇と将軍を日本の国王と評価していった。これにより、彼らは日本を連合国家的な要素をもった国家と認識したと考えら

れる。この畿内布教期に、イエズス会宣教師による日本の国家観がほぼ確立したといえる。

以上の国家観が織豊期に入って変化があるか否か。宣教師は、足利義昭を奉じて上洛した永禄11年頃の織田政権を他の戦国大名と同様に扱っていたが、翌永禄12年に入ると認識を改めていった。イエズス会の京都滞在をめぐって、天皇は宣教師追放の論旨を、織田信長は京都滞在を認める朱印状を発給した。フロイス等イエズス会やその擁護者和田惟政などは信長の朱印状を、一方の仏僧日乗をはじめとする反キリシタン勢力は論旨を根拠として対立し、この対立の渦に、発給者である織田信長や正親町天皇も巻き込まれることになった。これに対して、織田信長と正親町天皇はお互い対立することを回避し、穏便に事を片づけていった様子が宣教師史料から読みとれる。永禄年間の織田政権や中央権力のありようとして注目されよう。織田権力は絶対権力を有していても、中央政権としては未熟な段階であったといえる。

その信長も晩年には、宣教師によって「天下の君主」と表現されるようになる。彼らが「天下の君主」を絶対君主と評価していたことと、信長に続く豊臣秀吉・徳川家康にもこの称号を用いたことから、織豊政権および徳川政権をこれまでとは違った日本の新たな中央政権と位置づけていたことがわかる。そして、「天下の君主」が信長の時代から使用されることから、織田政権をその新たな中央政権の創始とみてとることができる。

こうした新たな武家政権の誕生を読みとる一方で、豊臣期に彼らは天皇の権威にも注目した。秀吉は全国制覇の過程で関白に就任するが、その際天皇より関白号が授与されることを宣教師は知り、天皇に対する注目度が一気に上がった。武家政権によって全国統一が果たされてもなお、天皇および朝廷の存在が否定されなかったことが、宣教師にとって奇異に映ったものと思われる。彼らは、天皇の権威の源泉を、それまでの偶像崇拜の象徴としてだけでなく、官職授与という世俗面においても把握するようになった。

このように、イエズス会宣教師が見た中近世移行期日本は、大名領国と日本全国という重層的な国家構造をなす連合国家的な要素を持つ国家であり、その上部構造は二人の日本国王からなる二元体制であった。

#### 4. 総評

本論文はイエズス会宣教師の書翰(編纂史料でない原文書)を用いて、中近世移行期の政治情勢を分析し、近世権力・国家構造の性格を展望した。宣教師の史料だから信用できない(宣教師の誇張癖など)とか、都合のいい部分だけ利用される(キリシタンは信長によって特別に保護されていた、など)というように、従来、宣教師史料は確かに研究史において十分活用されてこなかったといえる。それは、訳者により訳語が不統一で、それぞれの訳語のイメージも論者により相違してきたことが主な原因である。本論文では、宣教師史料で使用する語の相違を緻密に検討し、そうした問題点を克服することに成功している。

特に以下の点を実証したことの意味は大きい。①宣教師の日本語能力の高さ、②信長は特別にキリシタンを優遇していなかったこと、③信長は宣教師保護を企図する義昭と宣教

師追放を企図する天皇の間でバランスをとっていたこと、である。このうち、②については、信長が与えた朱印状は、布教許可状でも、滞在許可状でもなく、寺社に多数発給していた禁制(寄宿の禁止、役の免除、妨害からの保護)のひとつであったことを実証してみせたのは、当該期のキリシタンの位置を考えるうえでも重要な指摘である。また、③については、織田権力の不安定さを示しており、信長も朝廷の存在は無視できなかったことを意味する。

また、宣教師の重層的な権力・国家認識とその変遷を明らかにしたのは、当該期のヨーロッパと比較するうえでも重要な試みである。本論文によれば、①ザビエル来日前は、アンジローからの聞き取りによるランチロットの日本報告から天皇と将軍を「国王」と認識した、②ザビエル入京後は、天皇と将軍は「国王」に値せず、戦国大名こそ「国王」であり、日本は複数の国家から構成されていると認識した、③戦国期畿内布教後は、天皇と将軍を戦国大名の上位権力として理解し、連合国家として認識した、④織豊期・徳川期は、連合国家のうち上位部分が専制化したと認識した、と推移したという。本論文で論証した宣教師の国家構造認識は、それがそのまま実態であったとはいえないが、ヨーロッパから来た宣教師の目から見た16世紀後期前後の日本の国家・権力のあり方であるから、同時代のヨーロッパのそれと比較するうえで重要な材料となる。本論文はまだそこまで踏み込んで検討していないが、比較王権論に展開する可能性を秘めており、今後の発展的研究に期待がもてる。

## 5. 今後の課題

本論文が後年に編纂されたものでないイエズス会宣教師の書翰を緻密に分析して、宣教師史料の有効性を論証したことは高く評価されるべきである。しかし、宣教師史料の新たな可能性について課題がないわけでない。宣教師は当該期日本の権力者に関する動向を数多く書翰に記したわけだが、そもそも彼らはなぜ権力者に関する動向を伝える史料を残したのか。彼らが権力者に注目する理由についての分析がもう少しほしいところである。

本論文は、宣教師史料が従来、宗教史(あるいは対外関係史)にしか活用されてこなかったと指摘したうえで、これらが政治史にも十分使用可能であることを強調する。しかし、政治史と宗教史ははっきり区分できるかどうか、あるいは区分して考えることにどんな意味があるか。政治史・宗教史を明確に区分することには若干の違和感がある。本論文によれば、従来、宣教師史料は宗教史研究に使用されてきたというが、それは疑わしい。キリシタン史という単独の分野史研究では確かに活用されてきたし、多くの蓄積があるが、それが当該期の宗教史全体のなかにどのように組み込めるかが明らかにされてきたとはいえない。最近、ようやく最高権力者の神格化の問題が注目され、近世王権論の端緒が見られるものの、そうした議論はまだ始まったばかりである。つまり、従来の織豊期権力論(近世権力論も含む)は権力の宗教性を十分ふまえて議論されていないのであって、今後、王権論をさらに深化させようとするのであれば、政治史と宗教史を分別するというのではなく、む

しろその融合を意識すべきではないか。宣教師史料は、宗教者という立場性をふまえて作成された史料であるから、これほど王権論を議論する上で重要な史料はない。宗教問題と、近世権力につながる統一権力の政権構想とは不可分の関係にあるから、当該期のキリシタンや宣教師をめぐる問題を排除して、統一権力の形成を総体として議論できないはずである。本論文はその当事者である宣教師史料の緻密な検討が必要であることを論証したという意味で、画期的な研究ということができ、今後そうした課題を念頭に政治史と宗教史を総体として明らかにしていくことが期待される。

これは本論文の評価をおとしめるものではなく、本論文が発展的な課題を自ら示唆しているという意味で、むしろさらに高い評価を付与するものである。

以上により、本論文の著者松本和也氏は本学の博士(学術)の学位が与えられるのにふさわしいとの見解で、審査員一同一致した。ここに報告する次第である。